

幼児教育科に於ける ソルフェージュ教育の問題点

志 賀 朝

はじめに

短大の幼児教育科で四年半ソルフェージュ教育を担当して、いくつかの問題点に行き当たった。小学校、中学校を文部省の教程によるごく普通の音楽教育を受けた短大生に、幼稚園教諭としての専門的音楽教育をするための基礎として、ソルフェージュ教育は非常に重要な役割を持っている。高校で音楽を選択した者もあるが、技術的な面では殆んど中学までの教育の者と変わらない。ソルフェージュは、メロディ、ハーモニー聴音と並行して行っているのも、その三つを一緒に論じなければならないが、今回はソルフェージュの面から見てそれを取り上げてみようと思う。

1 拍子リズム

先づ読譜に当って、正しく拍子がとれなければならない。リズムは一拍の分割、又は結合の種々のパターンに分解して説明すると楽に把握する事が出来るようである。しかし音符の部分はよいが休符はとかく長さが狂いがちで、音符と休符を同じに扱えるようになるには少し時間がかかるようである。音楽的な面から見れば、個人差はあるが、まあまあ大部分がそれ程苦労しなくても出来るようになってくるようである。

2 音程をとる事

此の部分には全く沢山の問題がある。本校では固定ド唱法を用いているが、小、中学校で移

動ド唱法を9年間学んでいたにもかかわらず、ハ長調でさえ音程が非常にとれないのである。リズムを読む事は比較的すらすら出来るのに、音程はとれない。此のバランスの悪さはどこから来るのであろうか。一人一人新曲を読ませてみると音程の取れない者に共通の欠点が見付かった。それは学校で集団で楽譜を見て歌うことが多かったためか、自分自身で音の高さを考え、作って歌わないのである。

その1

自分の出来ない所は他人の歌うのを聞いてその後から続いて歌い、譜面は読めていないのに何となく出来たつもりでいる。

その2

長年の間に頭に入ったメロディーのパターンを引き出して、似た形をした譜面に当てはめて歌う。此の場合、一つ一つの音をよく見ているわけではないので、うまくまぐれあたりに当てはまる事もあるが、非和声音が出てくると全く違う音になってしまったりする。

その2のタイプは非常に多く殆どの学生はこれに入るのである。そこで

集団で指導する場合は

- 1 リズムを視唱する。
- 2 リズムをつけず音の高さだけを唱う。
- 3 1, 2を総合して唱う。

ことをくり返し練習させた。2の音の高さだけ唱う時は譜面を見せていると間違った音を出す事がある。その時に譜面を見せずに音名で音を与えると、正しく唱う事が出来るのである。これは、一つ一つの音の高さを考えて出せば間違えずに出せるのに、譜面を見ると何かあるメロディーを唱わなければならないような意識が働くらしく、勝手に自分の頭の中にあるメロデ

ィーを唱うからである。そこで音の高さを一つ一つ正しくとる練習を徹底的に行った結果、注意して音の高さを先づ考えるという習慣がついたようである。ここから先は2音間の音程として音をつかむ事に持って行けば、調性の中の機能的な意味、和声的な事へのつながりも長い時間はかからないで出来るようである。

固定ド唱法を用いる事について、移動ド唱法で勉強したものが固定ド唱法に変更するのは、なかなかむづかしい場合もあるが、それ程移動ドが読めるわけでもないので、割合抵抗なく、固定ド唱法に変わっているようである。

個人的な指導の場合は

集団的な指導と同じであるが、決して先を急がず音が間違ったら止めて、その音からよく考えて唱わせるようにする。どんなにたどろしくても、一つ一つ高さを考えて唱っていると読譜力は非常についてくる。又今唱っている次の音を常に見ている事を注意する。次の音を見て音の高さを考える事は始めはむづかしいが慣れれば段々出来るようになるものである。方法としては、今声の出ている音符を手でかくして次の音符を見るようにするとよい。

音程が正しく取れるようになるには、回数のかり返しが必要であって、意識を持って何度も何度も練習する事以外は方法はない。

その他、総合的な事では、意味もなく同じ所をくり返してみたり、止まってみたりする者がある。これはつまらない事のようにだが非常に重要な事であると考え。音楽は時間の芸術であるから、始まったからには必ずあるテンポで、終りまで流れて行かなければならない。という事は、音をコントロールする神経がバランスよくその時間内に働いていなければならないのである。神経を保持するバランスが悪いと、終りの少し前まで来てゆるんでしまい間違えたり、

止まったりする。又何度も止まってやり直しをしたりする。それ等の事を直すためには、少々間違えには目をつぶって、とにかく先へ先へ終りまで唱うという練習も必要のようである。ある一定時間神経を緊張させて、拍子、リズム音程に気をくばり、終りまで唱うという事は、当り前の事のようなのであるがなかなか鍛錬のいる事のように思う。そしてそれが出来なければ部分的に何が出来ても音楽は無に等しくなってしまうであろう。

3 フレージング

これは楽式が分かっているれば、頭で考え楽譜を見れば充分理解出来る事である。然し楽譜から読み取ったフレーズを実際の音に出して体で感じる事が大切である。始めのうちでも非常に基本的な形の曲は今までの経験で無意識に正しいフレージングで唱うようである。それを理論の裏付けで可能性をひろげ、晩学の人のおち入りやすい、あまり頭でばかり作ったのではないよいフレージングが出来る事が望ましい。

お わ り に

幼児教育科に入学した学生は素質的には音楽を学ぶ適応性を持った者であるし、現在の日本の高校卒業生としては最も平均的な音楽教育を受けた者ばかりである。然し二年間で幼稚園教諭の実力をつけるには前述のように入学時に於いて基礎の音楽的学力に非常にむらがあるのである。そのソルフェージュ教育を行ってみて、音楽専門家になるための教育とは又違ったこれ等の音楽上の問題点はこれから先も同じような状態で続いて行くと思われるので、なお一そう指導方法の研究を行いたいと思っている。